

媛っこ地鶏の普及方策

養鶏試験場

難波江 祐介、高橋敏方

1. 緒言

養鶏試験場では、平成 13 年度に高品質肉用鶏である「媛鶏試 33 号」の作出に成功し、翌年度には生産者も定着した。また平成 15 年度は、名称を一般公募し、「媛っこ地鶏」と命名されたところである。

さらに、安定的な生産供給体制を確立し、県民一般に広く普及定着させるため、生産者自らが媛っこ地鶏振興協議会を立ち上げ、現在に至っている。

協議会の初年度の活動として、まず PR が大事であるとの認識からこのパンフレット（写真 - 1）を作成し、日々の営業活動に役立てている。また、ロゴマーク（写真 - 2）は会員の協力により提供されたものを協議会のロゴマークとするなど、経費の節減にも努力している。

そのような活動の結果、現在、東予地区 8 戸、中予地区 8 戸、南予地区 14 戸の計 30 戸の生産者が月 4500 羽の生産に取り組んでおり、その中には他業種からの参入や、Uターンあるいは他の農業分野からの参入など養鶏の未経験の方が多数いる。

そのため、関係機関が連携して巡回指導を実施した。その結果、飼養形態は鶏舎型（写真 - 3）、簡易な鶏舎型（写真 - 4）、放飼型（写真 - 5）と様々であった。また、一人当たりの飼養羽数が 100 羽から 200 羽、1 羽当りの販売単価が 1,500 円から 3,000 円、粗利益が 3 万円から 20 万円まで、単純計算で 1 羽当りに換算すると 300 円から 1,000 円程度という多様な経営実態であった。

そこで、効率的な飼養技術を確立するため、密度及び飼育日数の違いによる肥育試験を実施し、若干の知見を得たのでその概要を報告する。



写真 - 1 パンフレット



写真 - 2 ロゴマーク



写真 - 3 鶏舎型



写真 - 4 簡易鶏舎型



写真 - 5 放飼型

2. 材料および方法

1) ワクチネーションプログラムの検討

通常ブロイラーの場合は8週齢という短期での出荷のため、ND又はNBを2回投与すればよいが、媛っこ地鶏は飼養期間が100日前後と長期になることから、家畜保健衛生所の協力を得て抗体価の追跡調査を実施した。

2) 肥育試験

1) 供試鶏

媛っこ地鶏(初生)

2) 試験期間

平成15年8月6日～11月24日

3) 試験区分

密度	飼 養 日 数		
5羽/m ²	90日	100日	110日
10羽/m ²	90日	100日	110日
15羽/m ²	90日	100日	110日

給与飼料はブロイラー用を用いた。

(参考)

5羽/m²は放飼場で飼育する場合の当场で推奨している密度

10羽/m²はJAS規格の地鶏の上限密度

15羽/m²はブロイラー的飼育密度

5) 飼養管理

0～4週齢は立体育すう器で飼養し、それ以降は平飼いとし、衛生管理は当场の常法とした。

3. 結果

ワクチネーションプログラムについては、60日齢でND又はNBの追加投与する必要が認めら

れた。(図 - 1)

育成率は m^2 5羽、10羽の区で斃死率が5%以内であったが、15羽の区では約10%という成績であった。(図 - 2)

次に飼料要求率では、100日齢ではいづれの区も3.1前後と差がなかったが、110日齢では15羽の区で3.5とかなり高い値を示した。また、15羽の区では90日で2.73と低い値であったが、これは高密度のため、餌が十分食べられてないためと考えらる。(図 - 3)

増体重においては、 m^2 当たり10羽の区が最も優れ、90日齢で3051g、100日齢で3233g、110日齢で3580gであった。また、15羽の区は先ほど示したとおり餌を十分食べられていないため、体重がのっていないことが顕著に出ていた。(図 - 4)

密度別の試験の飼育状況では、特に15羽の区で、写真 - 8のように居り場が小さいため、給水器の上に避難している。

また、餌や水を十分摂取できないため、他の鳥からの攻撃を受け、背中からお尻にかけての部分がはげている鶏が散見される。このようになると、皮が傷つくことから、商品価値が下がる原因となる。(写真 - 8)

5羽の区はこのように広すぎるため、鳥の運動量が多くなり、増体重が10羽(写真 - 7)の区に比べて悪い理由であると推察される。(写真 - 6)

日齢別、密度別の体重、と体重、正肉、もも、むね、ささみの重量については、体重は日齢によって増加し、10羽の区が一番大きい結果であった。また、100日までで、どの区も1Kg程度の正肉が採取できた。(表 - 1)

水分、保水力、伸展率については、大きな差はみとめられなかったが、水分は、日齢が進むにつれてどの密度も下がる傾向にあることから、飼養が長期になればなるほど肉のジューシーさを損う可能性があることが推察された。(表 - 2)

色と破断力については、結果に大きな差は認められなかった。(表 - 3)

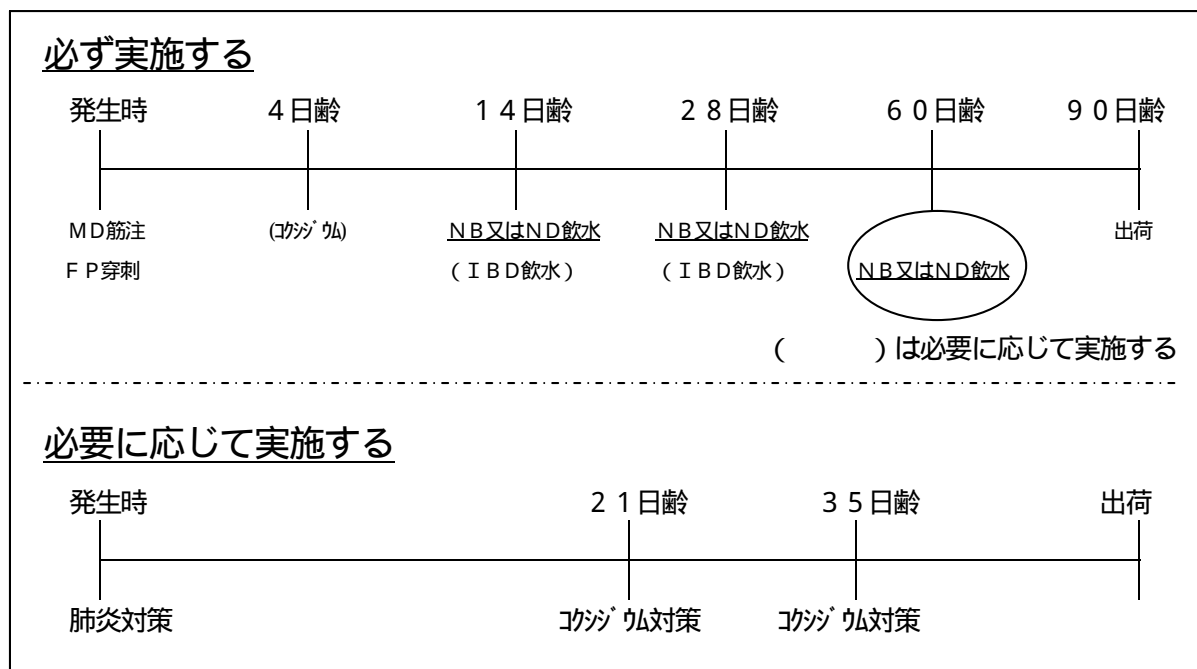


図 - 1 媛っこ地鶏ワクチネーションプログラム

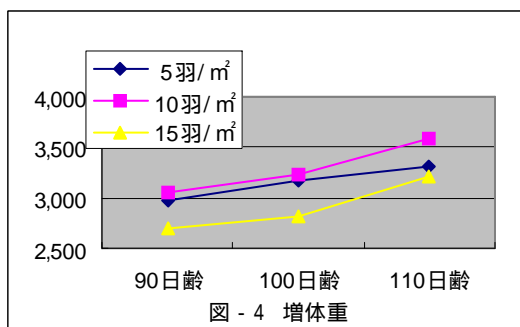
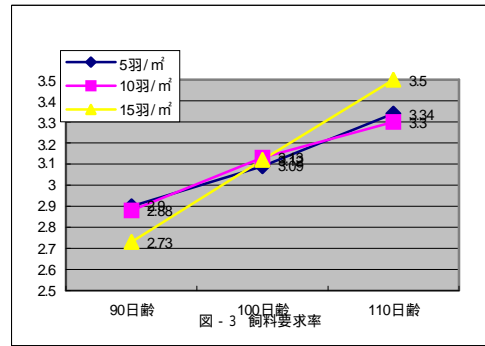
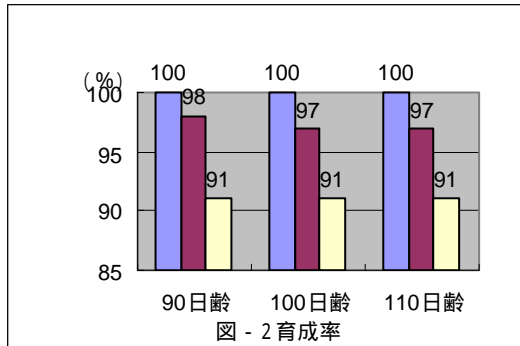


表 - 1 肉質検査結果 1

(g)

密度	日齢	生体重	と体重	正肉	もも肉	むね肉	ささみ
5羽/m ²	90日	2,967	2,685	1,064	570	395	99
	100日	3,175	2,873	1,106	607	399	100
	110日	3,305	2,725	1,144	649	395	100
10羽/m ²	90日	3,052	2,762	1,077	596	385	96
	100日	3,233	2,887	1,139	632	402	105
	110日	3,581	3,259	1,346	743	480	123
15羽/m ²	90日	2,693	2,454	920	510	327	82
	100日	2,807	2,617	995	553	353	89
	110日	3,203	2,892	1,178	649	419	110

表 - 2 肉質検査結果 2

密度	日齢	腹腔内脂肪 (g)	可食内臓 (g)	水分 (%)	保水力 (%)	伸展率 (%)
5羽/m ²	90日	67.7	135.3	72.5	89.7	35.3
	100日	87.7	133.3	74.0	85.8	26.5
	110日	102.2	127.3	71.8	87.3	33.8
10羽/m ²	90日	77.3	126.7	73.0	84.7	32.6
	100日	63.0	133.7	72.9	82.8	35.6
	110日	89.3	141.3	71.7	82.8	29.5
15羽/m ²	90日	64.0	127.0	74.5	86.4	31.8
	100日	58.3	126.7	73.6	86.5	32.4
	110日	60.7	132.0	72.8	86.2	28.8

表 - 3 肉質検査結果3

密度	日齢	L	a	b	破断力 (Kg/cm ²)
5羽/m ²	90日	41.0	0.5	8.8	0.8
	100日	47.8	-0.2	6.8	0.5
	110日	34.8	-0.3	8.5	0.7
10羽/m ²	90日	41.4	-1.0	6.8	0.7
	100日	39.5	-1.2	7.2	0.6
	110日	39.5	0.0	8.4	0.8
15羽/m ²	90日	46.9	-1.7	7.4	0.5
	100日	41.4	0.0	6.5	0.7
	110日	35.1	-0.6	6.8	0.8



写真 - 6

写真 - 7



写真 - 8

4. 考察

まず、ワクチネーションプログラムを確実に実施するため、媛っこ地鶏振興協議会でこれを義務付け、また、未経験者が多いことから、無薬飼料での飼育は可能な限り避けるよう指導した。

次に、試験結果から、媛っこ地鶏の飼養技術として、10羽/m²で飼養し、90日から100日程度で出荷することが最も効率的な生産方法であることが示唆された。

また、鶏を飼ううえで最も基本的な事項であるが、適切な給餌・給水、衛生対策、温度管理、観察という4つの項目を怠らないことが重要である。

なお、普及拡大にあたっては、新規就農者の獲得が重要であるが、土地、水、労働力、餌、処理業者、販売先、鶏及び精肉の運搬・輸送といった問題をクリアしなければ、新規就農は厳しいと考えられる。

さらに、媛っこ地鶏生産者の課題としては、自らの飼養能力を見極めた上で、生産コストを抑制する工夫をし、宣伝・営業努力を惜しまないことが成功する秘訣ではないかと考えられる。

今後円滑に普及させていくためには、媛っこ地鶏振興協議会が中心となって無理・無駄な飼養をさせないで、関係機関が連携を密にして巡回指導を実施し、飲食店・消費者等へ県や市町村の広報誌、インターネット等を活用しながら経費をかけないでマスメディアを利用しながら宣伝するといったサポート体制の確立が重要であると考えられる。(図 - 5)

また、生産者同士が連携を密にするとともに、媛っこ地鶏のブランド化(リピーターの定着)を推進することが必要であると考えられる。

したがって、技術的な指導から、生産流通にいたるまで様々な問題があることから、関係者が一丸となって個々の果たせる役割を十分認識したうえで、普及に取り組んで行く必要があると思われる。

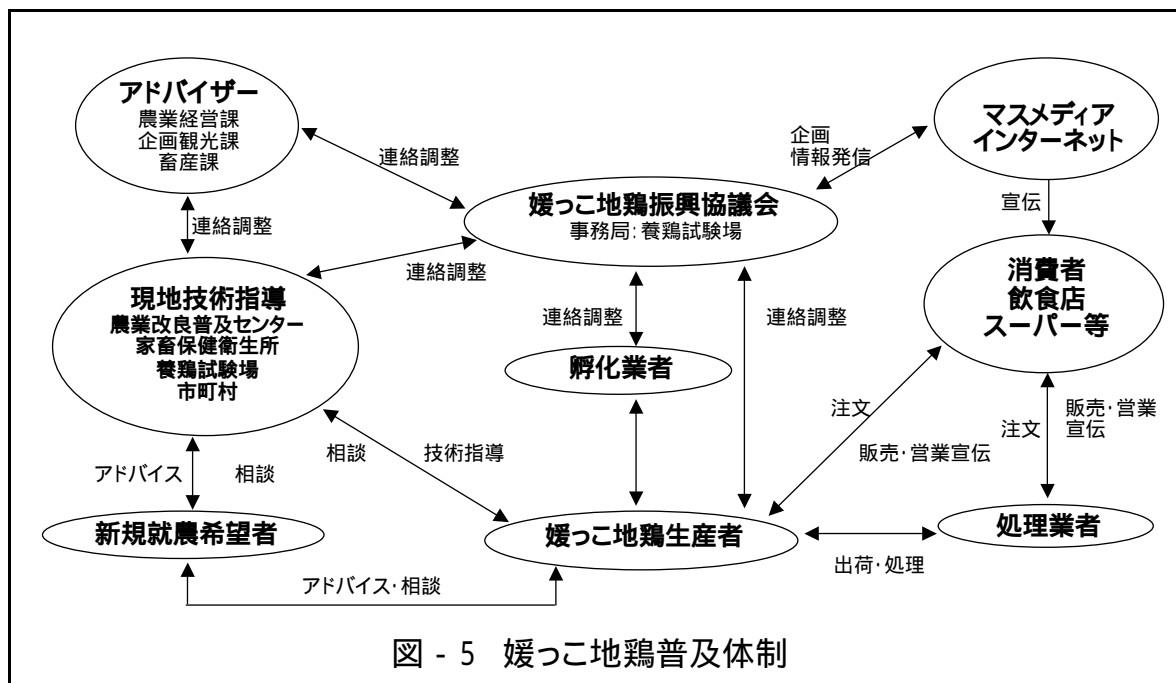


図 - 5 媛っこ地鶏普及体制

5 . 謝辞

ワクチネーションプログラムの作成ならびに巡回指導に協力いただいた家畜保健衛生所の皆様に深謝します。